

ここしばらくの科学基礎論教育をめぐるディスカッションは、「理系研究者の科学観がきわめて硬直的である」という指摘からスタートした。したがって、この「教育」は初中等教育・高等教育だけではなく、（各分野の専門家を対象とした）生涯教育も視野に入っていた。そのうえで「科学基礎論の教科書に含める内容はこういったものとなるだろうか？」「現在、科学基礎論の高等教育における授業はどういうものがあるだろうか？」という問いがたてられて、これまで科学基礎論学会大会時に授業実践を中心としたワークショップが行われてきた。

しかし、この学会が教育へ貢献するとしたら、それは学会そのものの方向性を問題としなければならない。中根発表にあったように、設立当初からこの学会は「異分野交流会」を意図したものであった。その後にも、科学基礎論という専門分野の研究者はむしろ少数派であり、幅広い分野の研究者に開かれたものであったし、現在もその意図のもとに運営されている。もしこの観察が正しければ、科学基礎論学会が会員および会員候補者に向けて発すべきメッセージは、「対話の共通基盤となる一定の知識を共有しよう」であり、そのなかに多様な科学観を含んだ科学方法論が含まれることになるだろう。さらに、科学基礎論学会の会員は、各レベルにわたってこのように位置づけられた科学方法論を教育担当者として提示できる人材とみなされることになる。

また、実質的に現在・今後にわたって高等教育レベルの科学教育にこのような「対話の共通基盤としての科学方法論」という内容を持ちこむのならば、教育思想・政策の変化に適応した内容・教育方法を取るべきだ。激変する社会情勢に合わせ、現在の教育のトレンドは、確立した知識の伝授から新たに問題を設定し解決するスキルの獲得支援に移っており、高等教育においても入試の多様化による学生の予備知識の変化と IT 技術の導入を反映して、学生の能動性を重視した双方向形式へと授業方式が変化してきている。実際、大量の知識伝達という点では講義形式は優れているが、学生が自分自身で作業を行う形式の方が知識の定着率は高く問題解決力の育成に寄与するといわれている。また、チームワークトレーニングを兼ねることが可能である。

ワークショップではこのスキル養成目的の授業を見学した報告（2011年10月）を行う。カナダ・クイーンズ大学理系共通科目「デザイン工学」では、人道的工学のチームプロジェクトを通して技術倫理の問題解決にむけ具体的な提案を行わせている。

上記の考察と例を踏まえ、改めて次の問いを立てたい。

- 科学基礎論学会と科学基礎論の関係は？
- 科学基礎論のコア・スキルはあるのか？あるとすれば何か？
- 科学基礎論学会が会員の教育業務を支援するとしたら、何ができるのか？そのうち何をすべき(すべきではない)か？